

ひょうたん島通信

大槌発! 第29回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



赤浜地区の整備計画に重要な一歩が

窪田 亜矢 工学系研究科特任教授(都市工学科地域デザイン研究室)

2011年から赤浜地区の話し合いにおけるコーディネーター役を、町役場から依頼されてきた。四年半にわたって、盛り土や事業や防潮堤について様々に議論してきた。赤浜のすべての方々がどこに住まうか、いつから住めるか、そうした基本的なことが明らかにしないと、とても住居以外の話までは気持ちをもっていけない、という点が話し合いの中では共有されてきた。特に低地部の利用については、なかなか話し合いの議題にならなかった。防潮堤の整備が遅れていることも背景にはあったと思う。ここで多くの方が亡くなったという事実は非常に重いものとして赤浜のみなさんの心の中を占めていたのだと思う。

ところが今年度に入って、少し雰囲気が変わってきた。だいたいの宅地が決まってきたこと、大幅に遅れているものの、住み始められる日が、実感されつつあるのだろう。これまでも多くの店があったわけではないが、もし純粋な住宅地だけになってしまったら、赤浜の遠い将来を考えると寂しい、何か生業や賑わいを作り出そうという真剣な思いが、湧き上がりがつつある。



→大槌町赤浜の若者による「赤浜虎舞」から発展した「陸中弁天虎舞」。

私はこうした赤浜のコーディネーターの他に、東京大学からはキャンパス計画室室員として、大気海洋研究所(以下、大海研)の国際沿岸海洋研究センターの建物を担当させていただいている。プロポーザル審査の中に、魅力的な計画提案があった。選ばれた設計者(類設計室)もまじえて、大海研や東京大学施設部の皆様と一緒に計画案についての議論を重ねている。

本日2015年12月7日は、こうした案を、町役場との調整も進めつつ、赤浜の自治会役員会の皆様にご提案する日だった。赤浜の方々との交流スペースとなるカフェ的空間や展示、あるいはミニ水族館の

ようなスペースについて、センター長の河村先生よりご説明があった。役員の皆様には、これから一緒にやっていきましょう、というメッセージが伝わったと感じた。もちろん12月19日に控えた復興協議会の場、すなわち役員だけでなく全赤浜住民の皆さんへの説明や、そこで交わされるご意見への対処、さらには非常にタイトなスケジュール、必要とされる複雑で膨大な調整などを考えると全く楽観視はできない。

しかし、大海研にとっても赤浜にとっても、希望と未来につながる重要な一歩が確実に進んだことは確かだ。

調査船 弥生のつばやき

サケの遡上と冬の訪れ

全国的に暖かな秋が話題となっていますが、大槌川にサケが上り始めるとそろそろ冬の訪れを感じます。道行く車もスタッドレスタイヤに履き替え、冬支度に余念がありません。一方、被災した国際沿岸海洋研究センター係船場の復旧は始まりましたが、完成は来年の夏。それまで私は、沖に入れたアンカー頼りの“宿無し”生活を続けざるを得ません。風当たり、波当たりを考えた係留強化による冬支度こそしてもらいましたが、西風の

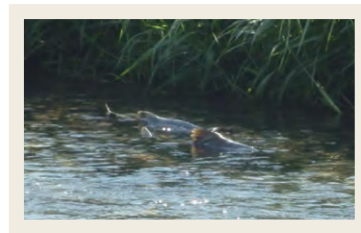


国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年になろうとしています。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当することになりました。

吹き荒れるこの季節になると寄るべき港を持たぬ心細さが身に染みます。でも、これが最後と思えばこそ、滲む涙も抑えることができるような気がしています。

赤浜地区の造成工事も急速に進展し、ようやく新センター建設予定地が姿を現しました。今度は高台の斜面に沿ったすいぶん縦長の敷地になるようです。上部に建設予定の研究棟や宿泊棟は、海から見ても目立つ大槌町のランドマークとなることでしょう。センターが山側へ移

転するため、我々調査船は少し寂しい思いをしていましたが、ぜひ立派な町のシンボルとなって欲しいと思っています。



大槌川を遡上するサケ。

制作：大気海洋研究所広報室(内線：66430)